
彼女との距離

raira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女との距離

【Nコード】

N5993P

【作者名】

r a i r a

【あらすじ】

僕と彼女は、微妙な距離にいる。

彼女のことが読めない僕は、想いを言葉にできない。

僕は、彼女に想いを伝えられるのだろうか。

「貴方って、幸せそうよね。」

零れてきた言葉に視線を向ければ、ぼんやりとした眼差しを向けられていた。

『…そう、みえているのだろうか？』

声には出さず、視線に考えを乗せる。

彼女は僕の考えが読めたのか、軽く笑う。

「だって、そう見えるんだもの。」

そう言われたところで僕は喜んでいいのか馬鹿にされていると怒ればいいのか…。

彼女は時々、読めないことを言う。

むっとした顔をすれば、彼女の軽い笑いは満足そうな笑顔に変わる。

「羨ましいのよ。私には、何が幸せなのかって、わからないから。」

笑顔でありながら困った顔をするなんて器用なことをしながら、僕へ手を伸ばす。

もともと近くに座っていたのだから気にすることじゃないのだろうが、体は正直というべきか。

野生動物のように跳ね上がる僕の心を見透かしたように、僕の体は、思わず後ずさる。

「ごめん…。」

ごめん。と言わなければならぬのは僕の方だというのに、日頃の習慣と化したその言葉を思わず零す。

気まずさに苦笑いをしながら僕は、彼女との距離を一步縮めた。

僕は口下手だから。

ごめん。などと、彼女が言わなくていいんだと素直に言えなくて、僕の想いを行動に乗せる。

僕が幸せそうにみえるのならば、それは彼女が隣にいるからで。

僕のことで彼女の気持ちを下げる訳じゃない。

『…』

声が形を成す前に、僕は口を噤んだ。
心中尋常でない僕に彼女は気付くこともなく、近づいた互いの距離に只々、嬉しそうに顔を綻ばす。

「いま、幸せかも。」

思いもよらなかった言葉に耳を疑う。

疑問だらけの顔を彼女に向ければ、丁寧に伝えられた。

「いま、私、貴方といられて、幸せよ。」

僕と彼女の幸せが同じものだと言って、嬉しくて嬉しくて。
無意識に彼女に僕の手を重ねた。

僕と彼女の距離は、今、重なっている。

僕は、今、とても幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5993p/>

彼女との距離

2010年12月25日14時48分発行